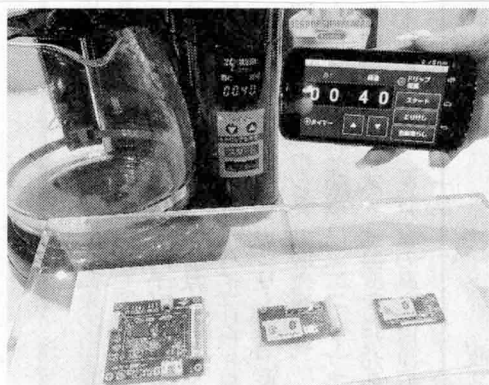


ガイアホールディングスグループのアプリケーションは、あらゆる機器で手軽に無線通信対応を実現するM2M（機械間通信）用モジュールを発表し、注目を集めている。

機器にモジュールを組み込むだけで、スマートフォンやクラウドサービスと連携する通信機能を実現できる。価格も1千円以下に抑え、低価格の白モノ家電やヘルスケア機器などあらゆる民生機器でM2Mを可能にする。



アプリケーション

これまで、電子機器に通信機能を追加するには、二つの大きな課題があった。一つは、通信対応化に伴う機器の再設計。外部機器で読み取れるようなデータを加工処理する必要がある、特にソフト面で大幅な開発負担が生じた。もう一つは、

コスト。無線通信モジュールの価格は数千円であり、価格競争の激しい民生機器の多くでは、コスト面から搭載できなかった。アプリケーションが開発したM2Mモジュールは、この二つの課題を解消。大幅な開発負担を軽減することで、体重が何%

1000円以下で無線通信実現

M2M用モジュール発表、注目

機器内に存在するデータ信号

ホスト側で変換

ず、安価に

「当社はソフト開発企業

ブルー투스対応モジュールを組み込んだコーヒーマーカーとスマホの連携デモはスマホ側でオンオフ制御やタイマー設定がリアルタイムで可能。さらに、コーヒーマーカー側にはない「蒸らし制御」などをアプリ側で処理してオンオフ信号としてコーヒーマーカーに送ることで、機器の付加価値を高めるといった応用もできる

であるかを把握できる。これまで、機器側で行おうとしていたデータ変換処理を、スマホやサーバーといったホスト側で行うという仕組みだ。

第1弾のモジュール製品は、通信では、UART、IC、USBなど、機器内で使用される各種インターフェイスに流れる信号データを通して、既にあるデータを送信することが可能。今後、アナログ信号をそのまま送信できるIC、モジュールの開発も進める。モジュールには、スマホやタブレット端末との連携向けのBluetoothウース対応品と、クラウドサービス連携用の3G回線対応品の2種がある。そして、モジュールは1千円を切る低価格を実現する。モジュール側で高度な処理を行わないため、高価なプロセッサの必要がない。民生機器に特化することで、産機などで求められる広範な動作温度範囲保証などを省き、コストを抑制するもの。

「当社では、12年末をメドにモジュール製品をIC化する計画だ。郡山社長は「将来的に100円程度のコストでM2M機能を実現したい」としている。